

[27] キリアン振付 『パーフェクト・コンセプト』世界初演

1994年7月1日 東京新聞 夕刊

東京バレエ団がイリ・キリアンの新作を上演した。この計画をはじめて耳にしたとき、日本のタンサーにキリアンの振付が踊れるだろうか、正直いって不安だった。

キリアンのことは、ちょうど昨年かぐやひめの今頃『輝夜姫』というバレエについて書いたことがあるが、いま世界の最先端にある振付家。どこからこんなポーズや動きを思いつくのか、見ているうちに体がよじれるような気分になる。

たとえば数年前に彼のバレエ団が上演した『スタンピング・グラウンド』など、ダンサーの肉体は、ふつう人が人について抱いているイメージを超えて、獣や鳥のように不可思議な形を見せる。そういう奇異な造形の組み合わせによって、キリアンはいつも、精神の境界とか魂の故郷などといった状況を舞台のうえに現出するのである。

そのような振付を日本人が踊れるだろうか。日本はいまバレエ・ブームだと言われているが、しかし日本人のバレエ観はいまでもやはり裾がばつと横に広がったチュチュを着てトウ・シューズをはいたバレリーナなのである。

* * *

さて、問題のキリアンの新作の題名は『パーフェクト・コンセプト』。処女懐胎のことである。発想のヒントとして、頭の片隅にモンドリアンがあったという。キリアンは二十年前からオランダのNDT (Nederland Dance Theater) というバレエ団の芸術監督の座にあるが、モンドリアンもオランダの人、樹木の具象を追求したあげく四角と線の抽象に到達した画家である。

パーフェクト・コンセプト、つまり処女懐胎

[27] キリアン振付 『パーフェクト・コンセプト』世界初演

1994年7月1日 東京新聞 夕刊

とも、完璧な（自己完結した）想念とも訳すことのできる題名の由来は、部分的にはこのモンドリアンの芸術理念と重なり合う。

ほの暗い舞台は、上部に建築現場のクレーンのような鉄骨が横ざまに一本。上手に白く塗った樹が根っこもろとも逆さまに宙づりになっているのが不可解で、印象的である。

ひそやかな水の音に時折カラスの鳴き声が混じるなか、男女二人ずつ四人のダンサーがバッハに合わせて動きはじめる。装置も音楽も、また題名からの連想にしても、そこには何かとても原初的なものへのノスタルジックな感覚があつて、神経は無限に安らいでいく。私自身の感想を語れば、この世の果ての命つきる地点の静けさ、あるいは胎内での比類なき無為、そんなものが感じられたが、この空間にみながる質感はまさしくキリアン作品に固有のものだ。

踊り手は足首までのタイツ。女性もトウ・シューズははいていないが、おもしろいのは紫色の四角いスカートである。言ってみれば、竹ヒゴで張りを持たせた風、いやそれよりも歌舞伎の『暫』の巨大な袖と言ったほうがよさそうだ。それを男も女もスポーツと腰にはめると、ちょうどチュチュのように見える。はずして床にならべたり投げたりすると、まるで座布団のよう。それを片足にひっかけてくるくる回したりもする。この衣装とも小道具ともつかない物体は、全体を通じてじつに効果的に使われていたが、キリアンが自作の解説としてプログラムに書いた文章によれば「衣装、それは即ちカメレオンの悪夢。（…）隠れては探し、隠れては見つかる。」

雨だれのようなものうい効果音、そしてバッハとジョン・ケージの音楽が交錯するなかで、紫色の四

[27] キリアン振付 『パーフェクト・コンセプト』世界初演

1994年7月1日 東京新聞 夕刊

角いスカートを操って無心に動きを展開するダンス
ーたちを、後半、鉄骨から吊り下げられた移動照明
が照らし出す。すると彼らは強い光に照らされ、か
と思うと瞬時にして逆光に沈み、さまざまに位相を
変えて、そこから私たち観客が感じ取るのは、幾何
学的な構成のなかにある様式性、純粹性である。し
かもそれがじつに肌理きめの細かい、ほとんどもろいと
言っ*て*いいほどに繊細な感性をうかがわせるので、
ひよつとするとこれがキリアンにとっての日本だろ
うかとも思ったが、それは私一人の思い込みかもし
れない。

* * *

この公演ではキリアンの作品がもう一つ上演され
た。『ステッピング・ストーンズ』である。前述の『ス
タンピング・グラウンド』同様、オーストラリアの
アボリジニーの呪術的な踊りにインスピレーション
を受けたもので、十年ほど前の作だが、シャープで
モダンで、なおかつ土俗的。非常に重心の低い動き
が用いられていて、それがかえって日本人には得手
であるようにも見受けられる。たとえば、両足を大
きく左右に開いて腰を低く落としたのち、片足をゆ
っくり内輪にねじったりする。幕間にロビーで会っ
た日本舞踊家が「あれはわれわれにもできそうな動
きですね」と言った。

最先端のものを求めるには、自分自身のなかに深
く下りていくのが正解だということは、すべての芸
術にかかわる真理である。日本のバレエもしっかり
日本を見据えることから何かをつかめるのではない
かと、その時ふと思った。それがつまりは本当の意
味でのパーフェクト・コンセプトなのではない
だろうか。

[27] キリアン振付
『パーフェクト・コンセプション』世界初演

1994年7月1日 東京新聞 夕刊